

## 『平和と人権の危機に際して』

性差別問題特別委員会「戦後」70年の言葉

「戦後」70年。かつて日本は、あの戦争によって、アジアの国々を侵略、蹂躪し、多くの人々を傷つけました。また、自ら、沖縄における地上戦、各地での空襲、そして二つの原爆によって民間の人々が犠牲となる惨事を味わいました。その痛ましい体験を踏まえ、戦後、平和と基本的人権を謳う新憲法のもとに歩みを始めました。しかし、その後の歩みは、アメリカによる軍事、経済、政治あらゆる面での植民地とも言える状態が続き、アメリカがする戦争を後方で支えるものとなりました。朝鮮戦争、ベトナム戦争による特需に乗じて、経済的豊かさだけを追い求め、眼の前の自己の損得に呑み込まれるような中で、個々人の人権は軽んじられ、人類全体の平和を願う思いは失われていきました。競争を是とする新自由主義が広がり、力を振るい強大になり勝利することが至上目的となりました。その下で、社会の弱者、少数者は切り捨てられ、さらに差別され、暴力さえ受けています。私たちは、そのような差別と暴力は過去のものではなく、現在に至るまで進行中であることを覚え、深く憂います。

I、日本は、戦時中、朝鮮半島また他の国々の女性たちを、軍「慰安所」に強制連行しました。日韓併合によって植民地となった朝鮮半島の女性たちは、戦時動員体制に組み込まれ、虚偽の言葉によって騙され連れて来られ、軍と契約をした業者のもとで「性奴隷」として働かされました。そのような残酷な体験をした人々の悲しい叫びが無視されています。一部報道の誤りを突いて、「従軍慰安婦」の事実が何事も無かったかのように抹殺する動きがあります。外交上のパワーゲームにおいて不都合な事実とされ、「慰安婦」像の撤去の要求など、弁解と否定のロビー活動ばかりが為されています。私たちは、苦しみ続けてきたハルモニたちの叫びが掻き消されないようにその声に深く傾聴し、日本の犯した罪を忘れません。

II、日本は、1879年、軍隊の威嚇によって沖縄県を設置、「琉球処分」を行ないました。同化政策を進めながら、しかし沖縄の人々への差別は変わりませんでした。沖縄戦においては本土防衛の「捨石」にされ、住民を巻き込んだ地上戦では県民12万2000人が犠牲となりました。敗戦後、沖縄には、アメリカのアジア支配の基地として米軍が駐留することとなり、「銃剣とブルドーザー」によって住民の土地は強制接収されました。「核なし、基地なし、本土並み」の本土復帰運動が島ぐるみでなされ、1972年に返還、本土復帰が実現しました。しかし、その後も事態は変わらず、むしろ日米同盟による安全保障の名のもと、基地化はさらに進められ、在日米軍基地の74%が沖縄に集中するようになりました。そして、その基地の支配のもと、米兵による沖縄の女性に対する性暴力は止むことがありません。被害を受けた多くの女性たちが声をあげることができません。声を上げて、落ち度があったと容赦無い非難を受けることもあります。沖縄は、戦争と暴力によって傷つけられています。今、新基地さえ作られようとしています。沖縄は、まだ「戦後」を経験したことなく「戦中」のままです。私たちは、今もヤマト（本土）に住むものによって痛められ傷つけられている沖縄に目を向け、その声を聴き、沖縄から真の平和が始まることを祈り求めます。

III、日本は、セクシュアルマイノリティに対して不寛容な社会です。いわゆる先進国の共通理解からは大きく遅れ、社会全体にセクシュアルマイノリティの人々への無理解、嫌悪が広がっています。一部の行政自治体で同性愛のパートナーを認める動きはありますが、なお多くの

問題を含み持っています。マスメディア上では賑やかに活動している人々もいますが、彼女・彼らも、世間の「常識」から逸脱する存在として、刺激と興味本位の消耗品とされているのではないのでしょうか。性のあり方は、多様で深いものです。セクシュアルマイノリティであることは、罪ではありません。病気でもありません。勇気をもって命がけでカミングアウトする声を、真剣に丁寧に聴かねばなりません。私たちは、一人一人の性を受けとめ、喜び、尊重する社会を創っていきたいと願います。

IV、日本の教会は、女性やセクシュアルマイノリティへの性的差別の問題を抱えています。そして、ハラスメント（性的暴力）に至ることもあります。多くの教会で、女性が牧師になることには抵抗があり、神学校を卒業しても赴任先が見つからなかったり、短期間で辞任に至らされるケースが少なくありません。また、「牧師夫人」という立場で、男性牧師の連れ合いの女性たちが自らのアイデンティティに深く悩み、苦しむこともあります。教会の役職、奉仕において、社会的に造られたジェンダー（男らしさ、女らしさ）の固定化があり、各自の賜物が押さえつけられ、豊かに生かされてはいないのではないのでしょうか。私たちは、男・女という性別を先行させるのではなく、一人一人がその人らしく、生き、神の恵みに応え、キリストに従う歩みをする教会を求め、形成していきます。

「戦後」70年。今、日本は、あの戦争の痛みを忘れ、平和と人権を軽んじ、安保関連法案を成立させ、辺野古への基地移設を進めるなど、力を振るう暴力の道を突き進んでいます。戦後、平和運動や人権運動によって培われたものが壊され、バックラッシュ（反動）を起こしています。徹底した性的二分主義と異性愛主義が台頭してきています。「働く女性を応援する」とは口先だけで、社会に進出する女性たちへの誹謗中傷は後を絶ちません。議会で平和や人権を語っても、汚いやジの言葉が飛んできます。街では、外国人を排斥し、同性愛者を侮蔑するヘイトスピーチが行なわれています。戦争という直接的暴力だけでなく、差別や中傷という間接的暴力が増し、溢れています。このように社会全体が力への幻想によってこわばっていく中で、私たちは、それに抗して、一人一人がかけがえのない存在として尊重され、自由にその人らしく生きることができる、大らかでしなやかな社会と教会の実現を願います。そして、今、傷つけられ弱くされ、呻いている人々の痛みを受けとめ、共に担いながら、キリストにある真の平和に向かって歩んでいきます。

2015年10月10日

日本バプテスト連盟性差別問題特別委員会